

随想

ホモサピエンスとしての生き方

「理屈で説明できない感性を武器に、どう生き抜くか」

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

先週末のテレビで《未開の人類》が見つかった、というニュースが各テレビ局で報道された。ブラジルの密林で一人が確認された、というのである。ブラジルには、このような部族が一〇〇以上あることにも触れられていた。

今、『サピエンス全史』というコバル・ハラリによる大作を携帯書物で読んでいます。人類が発生して以来、ホモ・サピエンスがその他の人類と競いながら最後には一種類の勝ち残りとなった経過を、証拠を上げながら推察している《学術的》な書物である。

著者らの時代に学んだ人類の進化と現在の人類進化化学では、相当異なっている。

時代はすでに終わり、テクノロジ―は僕たちの経済や社会を根底から変えようとしています。以下略：』

現実、さまざまなテクノロジ―が生産機構、流通機構、社会機構を大きく変貌させてしまっている。もっとも、過渡期の末期である現代、まだ過去の機構にそのまま残り残しているケースも混在している。

著者は、一昨日最新システムの産卵用鶏舎を巡回し、その運営と維持のベストに対してのコメントを述べてきた。そして昨日は、平均一万羽(五、〇〇〇羽/鶏舎)を飼養する九軒の生産農家グループを巡回し、今襲来している低卵価時代をいかに乗り切るかについて語り合った。企業化された巨大採卵養鶏生産会社から見ると、零細な生産農家はこの時代から取り残された存在として映るであろう。

一方、八〇歳を越えながら、今なお現役の生産農家にとつて、経営を続けることが人生そのものであることも事実であ

昔、現代人の先祖に位置付けられていた《ネアンデルタール》は現代人とは発生的には異なる人種であった、という。最新の遺伝子学的な研究で現代人には四％程度のネアンデルタール人の遺伝子を持っていることが明らかになっていく。つまり、別の人類であったホモ・サピエンスとネアンデルタール人は生き残りの競争をしながら、一部混血もしていたということになる。

それぞれの人類がいかに進化したかを学ぶのも極めて興味あるテーマであるが、ここでは、あくまでホモ・サピエンスに限定して、狩猟・採集に依存していた部族から栽培文明へ移行し、それによって何を得て何を失ったのか、を考えてみた。

わが業界も、最新技術を駆使する大型と感性のみを武器にしている生産者が混在している。

現在の低卵価環境では《金》の重みは高卵価の時に増して実感される。《金》を離れた価値観議論は、《金》がある環境でこそ説得力がある。しかし、《金》がすべてであっては救いがないことも事実であろう。ここではあえて《金》のあるなしを離れて、価値について考えてみたい。

伊藤穰一氏は「生きている意味」ブ・ライフ(生きている意味)について次のように語る。

『前略：今がテクノロジ―により新たな通貨が生まれるタイミングであるため、お金について考えることがより大切になっていきます。すでにお金を持っている人たちについては、お金で買うことができない「ミネリング・オブ・ライフ」(生きていく意味)を今以上に考える必要が出てきました。一方で、お金は持っていないけど、ある特定の価値やコミュニティを持つているヒトについては、どんな価値をお金に交換して生

以前にも取り上げた『教養としてのテクノロジ―』(伊藤穰一著、NHK出版新書)という書物の内容に触れてみる。

この書物はテクノロジ―がAIに発展し、概念として理解し難い今日、これまで《教養として理解してきた技術》をその背景にある思想を理解する《フィロソフィー(哲学)として理解》する必要があり、として記述されている。こう説明してもしつくりこない方が多いであろう。言い換えれば、これまで技術を使えばよいモノから、どのように受け止めて使うべきかを考えながら使うヒトと、これまでのように技術を単純に使えばよい、と受けとめているヒトでは、社会における位置付けが明確に

きてゆくかを真剣に検討しなければなりません。

ただし、ノーベル賞を受賞した行動経済学者のダニエル・カーネマンは「お金によって得られる幸せは七・五万ドル程度までである」と述べています。以下略：』

《金》は大事であり、不思議でもある。今の日本ではかつてのように《生きていけるか》はさほど深刻な問題ではない。そういうと生活苦の悩みで自殺する人が増えている事実を挙げて異を唱えられるかもしれない。昨日インターネットでかつてのアイドル《天地真理の生活苦》が取り上げられていた。その一連の情報は、人生の岐路におけるミステイクと生活のダウンサイジングをできなかったことが主原因と述べられていた(著者も多くはしかりと思う)。しかし、カーネマンも認めるように七・五万ドル(日本円と使い勝手を加味すると年俸一、〇〇〇万円程度)までは《金》の存在は幸福感の増加に繋がっていると見える。まずは、このレベルを達成

異なってくる、とても説明すればよいであろうか!

内容は、「経済」「社会」「日本」と三つのパートに分けられている(内容に僅かではあるが、インディジネス・ピープル(原住民)としてアマゾン流域の極小民族についても触れられている)。今回は「経済」の中で《シンギュラリティ(技術が人間の知能に追い付くポイント)》時代に人間はAI(人工知能)時代をどのように受け入れるべきか?!》という観点から取り上げた。この書物の筆者(伊藤穰一氏)は序章の結びに次のように記述している。

『インターネットが一般に普及して、すでに二〇年がたちました。《情報革命》と呼ばれた

することのできる社会が望ましいことは認めざるを得ない。

一方で、《金》が人生の目的・目標である生き方は寂しいが、先に挙げたシンギュラリティ時代に、技術(AIを含む)に使われる立場に回っているのはカーネマンのいう基準に届くことは難しい。かつて《総中流社会》と呼ばれたわが国で急速に失われつつあるのが、その主体となる中流層である。《格差社会》で失われた中流層こそ、《カーネマンのいう年棒七・五万ドルの人々》であり、金の存在が幸福感に繋がる層である。今増加している低所得層では、幸せの前提である所得が不足しているのが現実と言えよう。

AIに駆使されないための生き方、それはヒトが感性として持っている《好き嫌い》という標準であろう。ヒトには理屈で説明できない感性・感情がある。これを武器に、以下に生き抜くかを追いかけることこそ、これからの人間の《パーソナリティ》であるまいか??